

22 ロシアにおける日本研究

——過去と現在の研究の中心と特徴——

アナトリー・V・ショーミン（ロシア科学アカデミー東洋学研究所）

ロシアにおける日本研究のはじまりは、2国間の国交が樹立する（1855年）前にさかのぼる。

1705年、ロシアのピョートルI世の治世中にロシアで最初の日本語学校が開設された。これはペテルブルグ航海学校に付属しており、教材として辞書・基本会話表現集・読本が使われた。1753年、この学校はイルクーツクに移り、今なお存続している。

より系統だった日本語の学習は、1870年、ペテルブルグ大学で日本語の授業が導入された時にはじまった。1888年、ロシアにおける日本研究の発展の基盤となる東洋学部がペテルブルグ大学にできた。有名な科学者、N. A. NevskiとN. I. Conradが、その学部の生徒であった。1899年、ウラジオストックの東洋学研究所で日本語の授業が始まり、著名な科学者であるD. M. PozdneevとE. G. Spalvinがそこで教えた。D. M. Pozdneevは日露辞典、日本史・日本地理に関する本の作者であり、E. G. Spalvinは日本史と日本語学習教材の著者である。

10月革命の後も、ペトログラード（前、ペテルブルグ）は、ロシアにおける日本研究の中心地として存続した。1920、30年代、N. I. Conradの指導のもと大学の中に日本語・日本文学の学部と、現代語研究所の中に、日本語学部が設立された。1930年代には、レニングラード（前、ペテルブルグ）で科学アカデミー東洋学研究所が設立された。この研究所では、日本古代文化が研究の中心となった。研究の基盤はアジア博物館の膨大な古代の写本と図書であり、研究所はアジア博物館と密接につながっていた。

1940年代、日本に関する研究の中心は、モスクワにあった。1941年、科学アカデミー東洋学研究所が設立され、その後東洋言語研究所（現在のモスクワ大学アジア・アフリカ研究所）が設立された。これらは、日本研究の専門家をつくり出す重要な役割を果たした。又、それはロシアにおける日本研究の重要な位置をしめる、国際関係研究所を設立する基盤としても役立った。

戦争（1941—1945）にロシアがまきこまれた後、1950年代は、特に歴史的な問題について認識を深めた時代である。この理由の一つは、資料の収集が拡大したことである。すなわち終戦の結果として、戦前に関する多くの文書と日本の戦争史に関するものが入手しやすくなった。この時、日露関係（1905—1945）、中国大陸における日本の戦争（1937—1945）、そして太平洋戦争（1941—1945）に関するいくつかの著書が出版された。

1945—55年、多くの研究が戦後の日本の国内情勢、特に政治勢力の均衡とその変容に関し

て行われた。しかし、日本のこの時代の改革に関する徹底的な分析の欠如がある。日本人の国民性とこれらの改革についてはしばしばまちがって解釈されたが、現在ロシアは、それらの改革への認識の訂正とその頃のいくつかの評論の早急な見直しをよびかけている。

1955—1965年、ロシアにおける日本に関する研究の焦点は、日本外交政策問題、主に日米関係に関するものである。それらについての問題と研究は、世界の厳しい軍事政治上の対立によって影響をうけた。この状況は実際、1980年代中頃まで変わらなかった。

1965—1980年、日本の急速な経済発展に世界中の関心が集まった時、多くのロシア人科学者達も、日本の経済・社会問題の研究にかかわった。日本の外交政策の分野において中日関係の問題点の分析が、研究の中で目立っておこなわれた。今日、ロシアの多くの科学者達が認めているように、この時代はいわゆる日本の軍事問題に異常な注意をはらっていた。従って、1980年代のロシアでは、学校・研究所間の連絡網・資質のある専門家・日本の伝統的な考え方の収集等、日本研究の基盤ができあがった。

歴史と経済に加えて、日本文学と語学においても進歩がみられる。日本古典文学の翻訳、辞書そして日本語習得のためのテキストが、発行された。しかし、それらにひきかえ多くの問題点もある。1980年中頃、日本研究は科学と社会の分野において転機をむかえた。社会科学は、イデオロギーの独占的な状況のもとで後退した。自由な意見交換の制限と独断的な研究方法論は、日本研究をする上で大きな障害物となった。それらは現実から離れた、過度に単純化した固定観念の形成の理由ともなった。

1970—1990年の20年間にわたる140人の学位取得希望者の博士論文をみると、ロシアにおける日本に関する研究が、政治色の加わったものであるという結論にたどりつく。それは、論文のテーマをみても明白である。全体の80%をしめる歴史・経済の論文と政治との関わりは強い。日本語・文学・哲学・芸術は、残り20%である。1977年には、日本研究の専門家として知られている81人の中で、49人（60%）が、歴史と経済（主に政治、国際関係）にたずさわり、残り40%の学者達が、日本語・文学・哲学、そして芸術の研究分野に入っている。

戦後、1946—1990年にかけて芸術に関する博士論文はなく、ただ一つ哲学に関するものがあるが、それはマルクス主義についてのものである。この状況は、日本研究の分野だけにいえることでなく、全体としてこの時代のソビエト学問の特徴である。

民主化の過程の中で、ロシアの学問状況は学者達にとって、うけ入れられやすいものだ。過去においてとぎさされていたほとんどの資料は公開され、科学的な議論をする雰囲気はより自由になり、他国の研究機関との接触は広がった。日本を研究する研究所の活動は、変化している。現在、日本研究の重要な役割は、ロシア科学アカデミーのいくつかの研究所と高等教育の中の研究所に属している。

1) 科学アカデミー極東研究所（モスクワ）

主に、日本政治・北東アジアの安全と地域的な経済協力に関する研究

2) 科学アカデミー東洋学研究所（モスクワ）

日本社会史と日本経済部門から成り立つ。特に政治史と経済の分野に力をおいている。

日本文学と言語の研究にたずさわっている専門家も何人かいる。

付録 1

戦後、発表された修士論文の分野とデータ

年代	経 済	歴 史	文 学	言 語	哲 学
1946	Popov Kh. M.				
	Vaintswaig N. K.				
	Boldirev C. I.				
1948		Fainberg A. Y.			
1952	Lukjanova M. I.				
1955		Goldberg D. I.			
1960		Constantinov V. M.			
1961	Pevzner Ya. Kh.				
1964		Petrov D. V.			
1965	Dinkevich A. I.				
1966	Pigulevskaja E. A.				
1967		Latishev I. A.			
1970	Sharkov A. M.	Arutjunov S. A.	Gluskina A. E., Popov Kh. A.	Feldman-Conrad N. I.	
1971					
1972		Topekha P. P.	Pinus E. M.		
1973					
1974			Goregljad V.N., Ryokho C., Griv- nin V. S., Ermako- va L. M.	Golovnin I. V.	
1975	Ramzes V. B.			Neverov S. V.	
1976	Dobrovinski B. N.				
1979	Khlinov V. N.	Markov A. P., Savin A. S.	Grigorjeva T. P.	Boronina T. A.	Pospelov B. V.
1980					
1982					
1983				Alpatov B. M.	
1984		Podpalova G. I.			
1985	Curitsin A. N.				
1986		Khanin Z. Ya.			
1987			Bugaeva D. P.		
1989	Markarjants S. B.		Popov V. A.		
1990			Veresovskaja E.V.		

3) 科学アカデミー東洋学研究所ペテルブルグ支部

日本の古代史と文化の研究。最近では、宗教の研究も進んでいる。

4) 科学アカデミー世界経済・国際関係研究所（モスクワ）

日本と環太平洋地域の研究は、日本の社会・政治問題の学部と日本経済学部で行われている。主な研究分野は、日本経済である。

5) 科学アカデミー極東史・考古学・民族学研究所極東支部（ウラジオストック）

主に歴史の分野における日本とロシア極東地域の諸問題を扱っている。

- 6) 科学アカデミー経済研究所極東支部 (ハバロフスク)
アジア・環太平洋地域の国際問題の部門は、日本の経済問題を研究している。
- 7) モスクワ大学アジア・アフリカ研究所
主な研究分野は言語と文学である。
- 8) 外務省国際関係研究所 (モスクワ)
歴史・経済の分野で主に成り立っている。
- 9) ペテルブルグ大学 (ペテルブルグ)
ロシアにおける日本語と日本文学の最も古い研究所である。
- 10) 極東大学 (ウラジオストック)
日本学部では、日本語の授業が行われている。

上記のリストに加えて、いろいろな分野における日本の問題を研究する研究所や組織がたくさんある (科学アカデミー社会科学研究所、外務省外交研究所等)。この短い論説の中でさえ、ロシアが日本に常に強い関心をもっていることが明らかである。

科学的な面での接触と情報交換は広がるべきである。これに関するロシアの情勢は研究所の活動の経済的困難に拘わらず、改善されている。私は、東洋学研究所が、日本との関係改善とその基盤においてよりよい機会をもたらすことを希望する。

付録 2

- 1) 日露辞典 D. M. Pozdneev, 4万2000語、1908。
- 2) 日露小辞典 G. Monzeler, G. Tumanov, 1944、1946。
- 3) 日露辞典 (学校用) N. Feldman-Conrad, 5000語、1956、1977。
- 4) 露日ポケット辞典 S. Neverov, 7000語、1959。
- 5) 露日辞典 S. Zarubin, A. Rodztskin, 4万2000語、1964。
- 6) 日露発音辞典 L. Nemzer, N. Siromyatnikov, 3万4000語、1965。
- 7) 日露発音大辞典 S. Neverov, C. Popov, N. Siromyatnikov, N. Feldman, M. Tsin, V. Constantinov, 10万語、1970。
- 8) 日露小辞典 N. Feldman-Conrad, M. Dolya, G. Khit, 4000語、1980。
- 9) 日本姓名辞典 E. Folkman, 7万6260語、1958。
- 10) 日本地名辞典 A. Abolmasov, L. Nemzer, 6万語、1959。
- 11) 日露軍事辞典 A. Pashkovski, A. Rodzetskin, 2万語、1959。
- 12) 露日経済・対外貿易辞典 M. Tolokov, 1万5000語、1965。
- 13) 日露応用化学辞典 Z. Zavyalov, 3万5000語、1976。
- 14) 日露自動トラクターに関する辞典 B. Romanov, 1万4000語、1977。
- 15) 組織科学・ロボット工業に関する日露・露日辞典 E. Ivanova, A. Filatov, I. Khailov, 1万3000語、1979。
- 16) ラジオ電子工学に関する日露辞典 E. Azerbaev, M. Izutskiver, 3万5000語、1981。
- 17) 日・英・露物理辞典 Cim Mine, 2万4000語、1982。
- 18) 日露科学工業辞典 B. Zlomanov, 5000語、1983。
- 19) 日露化学工業辞典 A. Khachoyan, 3万2000語、1986。

- 20) 日露・露日宇宙航空辞典 V. Tenenbaum, L. Mossosov, 6万語、1989。
 21) 漁業に関する日露・露日辞典 L. Lisovenko, 2万9000語、1990。

付録3 日本に関する修士論文(1970—1990)

経済

- A. N. Avanesov 日本の燃料・原料の問題(1981)
 V. S. Azarov 資本主義転機の現段階における鉱物資源獲得闘争の矛盾(1979)
 T. S. Anikina 経済問題と日本の経済におけるレクリエーション部門の社会的役割(1985)
 L. P. Arskaja 開かれた経済と日本の労働者階級の状況における影響(1970)
 M. V. Baskakova 戦後日本の資本蓄積への国家独占資本の介入(1974)
 G. P. Blokin 経済の特質と日本自動車産業発展の展望(1974)
 A. D. Bogaturov 70—80年代の日本の外交政策におけるエネルギー・原料の供給問題(1982)
 S. V. Braginski 日本経済の国家独占資本の規制手段としての貨幣政策(1986)
 V. D. Caminski 戦後日本の造船業の発展の主な傾向(1979)
 N. S. Carpova 日本独占の海外貿易メカニズム(1985)
 T. V. Carjagina 石油ショック後の雇用・失業問題(1983)
 Y. P. Chegodar 資本の国際移転における日本(1986)
 A. V. Chuico 日本とオーストラリア間の貿易関係問題(1984)
 P. I. Cliaman 中日経済関係; 1949—1976(1977)
 E. B. Covrigin 日本の貿易資本における新しい状況(1974)
 A. V. Collontay 日本国家独占資本の国際的転換過程の特質(1984)
 V. A. Condrakhin 自動車市場の日米競争; 1960—1975(1977)
 O. S. Corchagina 日本の価格動向の内的・外的経済要因(1990)
 A. I. Cravtsevich 発展途上国への日本の技術・経済協力(1977)
 N. C. Cutsobina 日本漁業の社会的・経済的問題; 1945—1970(1975)
 C. E. Danyeljan ASEANにおける日本の新植民地主義: 経済側面(1988)
 A. Y. Danilov 80年代の予算の特質(1989)
 V. C. Dermanov 市場価格設定と商品事情: 日本とアメリカの事例(1979)
 S. A. Duikov 日ソ貿易経済関係: 主な傾向と問題点(1979)
 A. M. Gindiev 日米製造業における労働生産性の比較と分析(1978)
 E. V. Gorbunova 現在の日米間の資本主義対立の深刻化: 貿易経済面(1986)
 B. V. Ivanov 日本の林業と世界資本主義市場の経済問題: 傾向と見通し(1977)
 O. G. Ivanov 日本の自然保護運動の組織と活動(1979)
 T. E. Jarova 日本ゴム産業の経済(1973)
 A. I. Khrenov 戦後50年・60年代における日本の鉄鋼業の発展の特質(1972)
 V. O. Kistanov ラテンアメリカへの日本経済市場の浸透(1977)
 V. F. Lakhmachov 新植民地主義と侵略の手段としての輸出資本と帝国主義的援助: 日本を事例として(1970)
 L. L. Lavrinovich 日本の電気産業の発展における経済問題(1976)

- N. N. Maksimova 日本の海運 (1983)
- O. I. Maskimova 日本の化学製品独占の貿易活動 (1990)
- N. V. Maslov 日本経済の資本力：傾向と要因 (1986)
- T. H. Matrusova 日本の年金制度 (1980)
- A. T. Mellnikov 日本産業における科学的研究 (1974)
- A. S. Nesterov 日本鉄鋼業独占の海外貿易への波及 (1983)
- O. S. Novikov 日本と西ヨーロッパの経済関係 (1974)
- R. B. Nozdrjova 日本の貿易政策 (1973)
- A. A. Odintsov 国家独占資本主義の局面における現代日本の独占貿易 (1977)
- A. B. Orphenov 先進国における経営参加の問題点：日本に関する社会・経済分析 (1982)
- V. Y. Rosin 日本の国際的繁栄と資本拡大の傾向 (1984)
- O. S. Sedelnikov 日本経済の再建と国家の統制：内的要因 (1988)
- B. I. Sergeev 日本の資本貸付と国際的役割 (1979)
- N. Ju. Shevchenko 70—80年代の日米経済関係 (1984)
- A. I. Socolov 日本の経済成長の要因としての教育 (1975)
- V. R. Solovejov 新素材の製造のおもな傾向と日米産業界での効果的な利用法 (1990)
- M. V. Spandarjan 日本の自動車会社の営業組織と経営 (1984)
- S. S. Stankovski 貿易に対する日本の国家規制の新しい段階 (1987)
- E. A. Starovoytov 日本の鉄鋼業の経営 (1976)
- Ju. S. Stolyarov 現代日本の流通貨幣問題 (1972)
- V. I. Sukhanov 日本産業界における貸金システム (1975)
- M. V. Sutyagina 独占グループ「三菱」(1973)
- I. S. Tikhatskaya 日本産業界の供給源としての燃料・原料問題 (1981)
- I. L. Timonina 環境問題と日本の経済発展 (1981)
- I. S. Tselishev 現在の日本経済における貿易の役割 (1983)
- A. Y. Yakovlev 日本の建設業界：国家独占のメカニズム (1989)

歴史

- V. G. Arigirova インドシナにおけるアメリカ侵略失敗後の日本の東南アジア政策；1973—1983 (1985)
- V. V. Belashco 日本の労働組合運動の緊急問題 (1985)
- N. N. Bogdanets 戦後経済成長の競争における日本の政治戦略と戦術 (1988)
- V. N. Bunin 日本の支配層による軍事政策の立案における外的要因の役割 (1982)
- E. N. Cazachcova アメリカの極東政策の中の日本；1945—1951 (1973)
- E. B. Cezaschuk ベトナムへのアメリカの侵略政策における日本の役割；1965—1973 (1974)
- N. M. Chalicova 科学技術革新時代における女性の労働状況 (1978)
- S. V. Chugrov 日本の世論への国家主義的固定観念の影響；1964—1974 (1976)
- Y. Y. Klimov 日本の農民一揆；14—15世紀 (1986)
- V. N. Cobets 福沢諭吉の業績 (1978)
- I. E. Crugovikh 日本の外交政策の立案と施行の過程 (1981)
- S. I. Cuznetsov 大英帝国と日本の関係；1945—1962 (1984)

- A. V. Filippov 17、18世紀の日本の社会・政治構造の主な問題点：徳川時代の歴史的資料による (1989)
- A. I. Gladchenko 平均的日本人と政治家の政治生命との関連；1965—1975 (1980)
- A. E. Jucov 1918—1932の日本の政治的進展の特徴 (1980)
- S. B. Kisin 日本とアジアの地域的摩擦 (1988)
- V. T. Leshke 70年代の日米軍事協力の主な傾向 (1978)
- S. Ch. Lim 日本の反帝国主義学生運動の主な傾向；1965—1980 (1985)
- N. I. Lutsenko 第二次世界大戦以後のラテンアメリカへの日本の進出 (1983)
- V. V. Mararenko 日本資本主義起源の特性；1868—1914 (1985)
- V. A. Marinov 第一次世界大戦前の日露関係 (1971)
- S. A. Martishkin 日米関係の問題点に関する米国支配層の論争；1906—1914 (1990)
- A. N. Mescheryakov 日本の社会・政治紛争 (6—8世紀) と仏教・神道の関係 (1979)
- Y. D. Mikhaylov 日本の自由民権運動：その歴史と左翼のイデオロギー (1978)
- S. S. Modenov 日本労働者階級の日米軍事同盟と日本の再軍国化に対する紛争の先駆者的役割 (1972)
- Z. F. Morgun 日本支配階級の外交政策における韓国；1965—1975 (1979)
- B. N. Nebogatov 労働組合による春闘の起こりと発展；1955—1974 (1981)
- O. I. Nikolaeva 日本自民党のイデオロギーの政治的指針 (1989)
- E. A. Novichkova 日本戦前の社会学における西洋 (1981)
- G. V. Ojerelieva 北海道の形成史；1869—1945 (1988)
- G. A. Orionova 70年代の日米関係 (1975)
- A. N. Panov 日本における戦後の政治・経済改革；1945—1952 (1973)
- S. S. Paskov 19世紀末から20世紀初めの対中国政策についての同時代の日本中産階級の歴史記述 (1977)
- V. T. Pavlov 第二次世界大戦後のフランスと日本の外交政策におけるインドシナ (1984)
- L. P. Pinaev 日本軍事政策の進展；1951—1977 (1979)
- I. B. Ponomaryov 日米関係における政治の力関係の理論と実際 (1977)
- I. A. Romanova 戦後の日本における世論と外交政策 (1988)
- A. V. Shlindov 日中関係の進展に対するアメリカの影響 (1980)
- A. I. Shteingauz ロシアの出版物に記述されている日本と日露関係 (1989)
- T. G. Sila-Novitskaya 日本の天皇崇拝：神話・歴史・政策・政治 (1990)
- O. A. Stolyarova アジアの国際関係における日本とインド (1985)
- D. V. Strelitsov 日本外交政策の中の核問題 (1990)
- A. A. Tolstoguzov 北海道における労働者運動の歴史 (1980)
- T. G. Troyakova アメリカの対日本政策の進展 (1978)
- N. I. Tverdokhlebov 日本外交政策の中の海洋問題 (1984)
- S. I. Verbitski 日米相互協力と安保 (1970)
- I. V. Volkova 日本の対アフリカ政策 (1976)
- I. V. Vikhukholev アジア環太平洋地域における日本の外交政策 (1991)
- I. A. Visokovski 中国への外交政策立案時の日本マスメディアの役割 (1987)

- A. V. Vorontsov 70、80年代の米・日・韓国の関係 (1985)
 A. V. Zagorskia 日本と中国の歴史的発展の違いに関する日本の着想への批判的分析 (1986)
 G. F. Zakharova 満州における日本帝国主義の植民地政策 (1983)
 S. A. Zinchuk 日・米・韓国の極東における政治・軍事協力 (1990)
 V. G. Zorchenko 日本におけるアメリカの支配政策の第2段階 (1980)

文学

- T. U. Breslavets 松尾芭蕉の俳句 (1975)
 A. M. Cabanov 五山文学と日本文学史におけるその位置 (1983)
 E. L. Catasonova 谷崎潤一郎の作品 (1982)
 V. V. Curlatov クロシマ・デンジによる反戦作品 (1987)
 A. A. Dolin 日本ロマン主義と新しい詩のはじまり (1975)
 E. M. Dyakonova 正岡子規と俳句 (1979)
 L. M. Ermakova 大和物語 (1974)
 A. G. Fesquk 真言宗のひろがりと空也による作品 (1988)
 M. P. Gerasimova 今日と伝統：川端康成 (1983)
 G. B. Grigorieva 政治小説 (1990)
 V. A. Grishina 石川啄木による文芸批評と作品 (1974)
 I. V. Jukova 木下順二の作品と戦後日本の演劇論 (1981)
 G. A. Kholodovich 芥川龍之介とロシア古典散文の伝統 (1982)
 G. V. Khruslov 日本におけるロシア語 (1987)
 A. L. Lutski 実存主義と日本文学 (1987)
 V. P. Madzurik 文学における「ナンゾ」と日本の民俗学 (1984)
 E. E. Malinina 日本におけるツルゲーネフの作品の評価 (1989)
 I. V. Melnikova 18世紀日本文学における「読本」とタケベ・アヤタリによる「西山物語」 (1983)
 V. I. Odzogin 2国間の伝統の相互影響に関する研究：側面と方法（日本のトルストイ作品への理解を事例として） (1988)
 T. I. Rediko 井原西鶴の作品 (1978)
 A. P. Sadokova 日本月次祭の詩 (1989)
 G. G. Sviridov 説話による中世散文詩について (1979)
 E. B. Semenuta 日本文学とドストエフスキー (1986)
 N. S. Sheftelevich 島崎藤村の詩 (1975)
 E. S. Shtainer 15世紀の日本文学における漢詩と連歌 (1985)
 Simonova-Gudzenko 日本神話と日本古代史におけるその役割 (1979)
 M. V. Toropigina 義経物語と日本中世文学におけるその役割 (1989)
 A. V. Vovin 日本散文に用いられている言語 (1987)
 T. A. Yurkova 新劇とチャーホフ (1987)

言語

- A. S. Dibovski 現代日本語の相互作用 (1981)

V. V. Ribin 日本語の音節 (1986)

哲学

L. B. Carelova 石田梅岩の哲学 (1990)

Y. L. Cudzel 近松門左衛門の作品における彼の世界観 (1975)

V. M. Gaidar 日本のマルクス哲学思想の進展における三木清の役割 (1976)

A. A. Mikhalev 三木清の哲学的概念 (1987)

S. V. Panteleev 国家独占の資本主義状況下の日本人労働階級のイデオロギーの展開
(1988)

N. P. Soloviev 日本のマルクス哲学思想と三木清の批判的見解 (1972)